

[講演要旨]

雑誌論文が研究成果発表の手段であるのはいつまでか（土屋 俊）

雑誌は、実は隣同士はあまり関係がない論文を印刷しまとめて綴じたものを一定の分量が溜るタイミングを想定して定期的に頒布するという形態の学術コミュニケーション媒体である。この形態は、速報性、表現力、結節性、保存性、利便性において電子的な媒体を利用する形態によって凌駕され、現代におけるもっとも適切な媒体でなくなったことに疑問の余地はない。この結果、雑誌による論文刊行の意義をピアレビューによる品質保証機能に求めるようになってきている。しかし、研究成果を論文という形で表現し、それを雑誌という形で刊行することは、はたして学術コミュニケーションの必然的形態であるのだろうか。

20世紀後半からの学術研究の社会的位置づけ、実践様態、倫理的説明の必要性、さらに、学術研究を支える高等教育機関の変化は、学術コミュニケーションをたんに真理の伝達であるとして標榜することを許さなくなっているように思われる。この認識の背景と証拠について議論する。